



表情・身体動作の理解と一人称報告の信頼性に関する哲学的・経験科学的研究

長滝 祥司 中京大学国際学部・教授

人間は、他人の表情や身体動作からその人の心的状態を直観的に理解したり、性格傾向などを把握したりすることがある。こうした素朴心理学的能力を解明し精緻化しようとする学問上の関心も、科学革命の時代の観相学や観情学から、19世紀の骨相学やダーウィン進化論を経て20世紀の精神分析、一部の感情心理学へと続いている。これらの学問で使われていたのは、基本的には日常の人間観察と当人の内観による一人称的報告である。本研究では、素朴心理学をめぐる以上の流れに配慮しつつ、現代の現象学や心の哲学を理論的背景として、実証的方法によって得られたデータを用いながら、意識的、無意識的な表情・動作表出やそれらによる他者理解のメカニズムの解明を行った。その際、一人称的報告の信頼性についても、脳科学的データによってある程度擁護することができた。

具体的には、(ア) 観相学や観情学からダーウィンの表情論などに至る近代以降における素朴心理学の精緻化の歴史を哲学的・思想的観点から掘り下げ、日常経験を捉える現象学の理論や心の哲学との比較研究を行った。(イ)

心理学的、脳科学的な実験を遂行し、そこで得られたデータを(ア)の知見に照らし合わせて分析し、(ウ) 客観主義(科学的方法)と(ラーファター的な)主観主義を総合するような方法論を構築した。(ア)の比較研究においては、現象学と心の哲学のターミノロジーや方法論の違いには留意しつつ、具体的な事例を記述するターミノロジーに注目して、哲学史において素朴心理学的事象がどのように捉えられてきたかを精査した。現象学と心の哲学を架橋しようとする際に、特に後者においてデカルト主義に基づく二元論的発想の残滓がある点を指摘した。(イ)においては、内観による一人称報告の意義や射程を明らかにした。(ウ)が本研究のもっとも大きな課題であったが、(ア)であげた哲学的な成果を素朴心理学的なターミノロジーを精緻化し科学的データ(特に脳科学的データ)へと関連づけた。本研究は、こうした試みを「実験観相学・観情学」と名づけ、その成果を長滝祥司『メディアとしての身体』(東京大学出版会)の一部として刊行した。



縄文・弥生時代のトランスカルチャー状況(地域間交渉)と「顔・身体」装飾付土器

中村 耕作 国立歴史民俗博物館考古研究系・准教授

本班は縄文時代に、時期・地域を限って断続的に出現する顔・身体装飾がついた土器を対象に、その出現背景に「トランスカルチャー状況」と言える社会変動があったかもしれないという仮説を立て、その検証を行うことを目的とした。コロナ禍により予定していた現地調査や考古学者との共同研究は不調だったとはいえ、基礎資料の集成はほぼ終わり、系統的に整理した成果論文を順次執筆している。

特に、縄文時代後期後半は、異形台付土器・香炉形土器などの特殊器種、注口土器の各種の異形化が進行する中で、その最もエスカレートした段階に顔面装飾が出現すること、中でも最終形態として複数の顔を持つものが出現することを明らかにした。中には「ヒト」と「獣」のような種類の異なる顔表現の

ものもある。リアルな顔表現に強いメッセージ性のあることが推察されるので、今後はその点を心理学者とともに明らかにしていく必要がある。

本班の研究対象は領域関係者にはあまり馴染みの無いものかと思う。それでも、多くの方に関心をもってもらい、勉強会やシンポジウムに取り上げていただけた。後期期間中では唯一歴史的な流れを対象とした点、生身の人間やその延長である仮面ではなく偶像を対象とした点で、領域全体の研究の幅を広げる意味での貢献はできたのではないかと考えている。幸い、ここでの学際的議論のもとに、文化人類学の共同研究にお誘いいただき、また心理学・人類学共同の科研研究も申請することができた。多様な視点で顔身体土器を分析するという新たな展開が楽しみだ。

縄文時代後期中葉～後葉における顔身体土器出現に至る関連土器群の出現・交代モデル

